合志楓の森中学校だより

楓の誉

R6.3.21（第 12 号）
文責：渕上 佳宏

令和五年度 第二回 卒業証書授与式

令和五年度の課業日も、修了式を行う明日一日のみとなりました。この一年間、保護者や地域の皆様、学校関係者の皆様には、本校教育に多大なご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、三月八日、「令和五年度 第二回 卒業証書授与式」を挙行しました。本校の開校と同時に入学し、本校三年間の教育課程を初めて修了した令和五年度の卒業生（以下、本卒業生）は、新設校の黎明期に確かな足跡を残し、未来へ羽ばたいていきました。

私（校長）の本卒業生への印象を一言で述べると、それは「回復」です。思い返せば、本卒業生は、新型コロナの第一波や第二波、先行きが不透明で、パンデミックへの不安が最も大きかった時期に小学六年生でした。様々な行事や活動の中止・制限があったため、最高学年として活躍の場をもらって、自信を高めたり、リーダーシップを発揮したりするチャンスがとても少ない学年だったと思います。

しかし、本卒業生はそのハンデを乗り越え、あらゆる活動の場面で、本校生のプライド、つまり「楓の誇り」を見せてくれました。そして、その誇りに耐え得るに十分な実績を残してくれたと思っています。それは、単に学力を大きく伸ばしたというだけではありません。

体育大会では、団長を中心に各団がまとまり、自分たちで「気付き、考え、行動して」くれました。学校行事に、生徒が主体性を持って取り組むという我が校の伝統やスタイルは、多くの行事が第二回目だったからこそ、確立されたと言ってよいでしょう。

また、学習発表会おけるハンセン病家族訴訟をテーマに造り上げた構成劇は、圧巻でした。、熊本県人権子ども集会における体験報告も含め、我が校はハンセン病問題に係る人権教育のモデル校となりつつあります。その名誉ある立場は、本卒業生によって確立されたと言って過言ではないと思っています。

さらに先日、発表した校訓「稚心を去り、己を啓く」も、本卒業生が残してきた数多の実績に裏付けられたものと言えます。そう考えた時、本卒業生のコロナ禍からの「回復」は、三倍返しの「回復」であり、未来へと繋がる「回復」だったと思っています。

なお、卒業生一二〇名の進路確定は、公立高校の二次募集の結果を待つ生徒を残すのみとなりました。本年度の公立前期選抜の結果は、ほぼ志願倍率を反映するものでしたが、後期選抜については、ほとんどの高校で想定する合格率を大きく超える合格者を出しました。惜しくも一〇〇％合格とはいきませんでしたが、最後まで諦めず頑張った生徒たち全員に、後輩たちへの道標となったことへの感謝も含め、心から拍手を送りたいと思います。第一希望が叶わなかった生徒たちも、必ずやその悔しさをバネに、チャレンジを続けてくれるものと信じています。本卒業生一人一人が誇りを持って人生を生き抜き、自らの夢を叶えてくれることを祈りつつ、卒業へのお祝いと感謝の言葉としたいと思います。

本当に最後の編集後記

各年度の最後の学校便りには、「編集後記」なるものを書いたりするのですが、今回の編集後記が、正真正銘最後になりました。

私（校長）は、本校の開校以来、月一回発行のペースで、この学校だより「楓の誉」を発行してきました。「学校のできごと」的な内容は、学校ホームページの方に任せて、この便りでは校長が考える教育方針・教育観・教育理念等を中心に、自らの教職経験も振り返りながら、文章を綴ってきました。中にはアクの強い記述や嫌味な表現もあったりして、一部ご批判を賜ったこともありました。しかし、それも行間を含めてご精読いただいた証と受け止めており、お読みいただいた全ての皆様に感謝を申し上げたいと思っています。

また少し驚いたのですが、学校便りをしっかり読んでくれている生徒が、本校には少なからずいます。こういう文章を読み込める学力や意識の高さとともに、本校生としてのプライドをも感じます。ペーパレス化は簡単だったのですが、そのことに気付いたので、あえて紙媒体で配布していました。

私は、年度末をもって、三十七年間務めた県費負担教職員を退職します。その最後の三年間、この合志楓の森中学校で、とても充実した時間を過ごさせていただきました。たくさんの心に深く刻まれ、また誇らしさを感じる思い出ができた私は、本当に幸せ者です。

本校の生徒や教職員はもちろん、保護者・地域の皆様、学校関係の皆様、誠にありがとうございました。最後に、今後も合志楓の森中学校への変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げ、筆をおきたいと思います。

学校HPの
QRコード